
シャドウ

紅麗狼牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シャドウ

【Nコード】

N9794B

【作者名】

紅儷狼牙

【あらすじ】

人の心の中に巣食う影。悲しみ、怒り、憂い・・・ある一定の条件を超えたとき、それは具現化される。影を消し去る力をもつ少年影人。いつかわかる、記憶の真実。そして影人は成長する。

1、プロローグ

シャドウ 紅儷狼牙

1、プロローグ

激しく泣き叫ぶ子供。父親は血の付いた灰皿を手に呆然と立ち尽くしている。。

倒れたまま立ち上がろうとしない母親を見下ろして。

「おかあさん・・・おかあさん」

子供が揺り起こそうとするが、母親は動かない。

その姿に気付いたのだろうか。父親は灰皿を捨てて子供に近づいていく。

「おとうさん・・・？」

父親は子供を見下ろす。いや、倒れた母親を見下ろしている。子供には気付くこともしない。

「ごめんな・・・こうするしかなかったんだ」

虚ろな目をしたまま、キッチンへ向かう。

子供も後ろをつついていく。

ブシュッ

何かを貫くような音。広がる鮮血。倒れこむ父親。

「おと・・・う・・・さ・・・」

鉄の臭いがする。視界が朱くなる。

背後には倒れたままの母親。

目の前には血を噴出す父親。

2、影

2、影

1

黒崎影人は起きると同時に荒く呼吸をする。

日常の事だから慣れてしまったといえはそうかもしれないが、影人にしてみれば人生が一度終わった記憶だ。

母親と父親の他界。

今なお鮮明に残る記憶のせいで、影人の髪は真っ白になってしまっている。

毎日夢にうなされたための後遺症だ。

一時期は夢に呼応するように発狂していたこともある。

「・・・今日から学校だった」

呼吸を整え時計を見る。短針は7時を少し過ぎたあたりにあった。始業まではまだだいぶ時間がある。

ベットを降りると鏡の前に立った。

影人の全身が映る。

15歳となる少年としては、少し痩せているだろうか。

それも当然かもしれない。

影人は小学校、中学校と共に病院で過ごした。過去の記憶に悩まされていたからだ。

運動はしたものの、一般的なものと比べればやはり少ない。

そのかわりにと勉強はしていた。空き時間はだいたい医者を持つ

てきてくれるテキストを開いた。

おかげで普通の公立には通えるだけの能力はついている。

「母さん・・・父さん・・・」

死んでしまう以前の記憶は薄れ、残るのは瞬間のみ。

振り下ろされる灰皿。

倒れる母親。

目を見開き血を噴出す父親。

「いい記憶なんかないな・・・」

少し自虐的に笑うと部屋を出た。

影人は一人暮らした。

親戚は何人かいたものの事件のせいで、皆気味悪がって寄り付くうともしない。

あの家族は呪われている。

子供の髪の色をみてみる。

ああ恐ろしい、恐ろしい。

多種多様だが、大体は呪われているの一点張りだ。

確かに1人、2人は優しく接してくれた。

それでもどこかに影があった。

たぶん、同情だったのだろう。

影人はすべて断り、1人で生きることを決めた。

それが、自分と家族の思い出をとっておける一番の方法だと思っただからだ。

思い出といっても、もうあの一瞬しかないが。

それでも、後悔はしていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9794b/>

シャドウ

2010年10月16日01時37分発行